

Strix 12 : 227-230 (1993)

ヤツガシラ *Upupa epops* の巣箱での繁殖例

飯田知彦¹

はじめに

ヤツガシラ *Upupa epops* は、大陸では樹洞が主要な繁殖場所で、石垣や建物のすき間なども利用する (山階 1941, Panov 1992)。日本ではこれまで建物と石垣のすき間での繁殖例があるだけである (日本野鳥の会軽井沢支部 1987, 中村・柏木 1991, 藤井 1992)。広島県ではごく少数のヤツガシラが生息繁殖しているが、個体数は増加傾向にあるようである (飯田 未発表)。筆者は、数年前から調査用の巣箱を架設し、ヤツガシラの生態調査に利用しているので、その概要を報告する。

調査地

調査はいずれも広島県西部の、数年前からヤツガシラが繁殖している人家の散在する農村地帯で、生態調査の一環として行なった。これまでに巣箱はA調査地とB調査地の2か所で、計2回架設した。両調査地は直線距離で30km以上離れていた。なお、保護上の観点から、詳細な地名は省略する。

巣箱の構造および設置方法

巣箱の寸法は、図1のとおりである。巣穴の寸法や巣の内部空間にあたる巣箱全体の大きさは、ヤツガシラの体の大きさやほかの営巣場所の例から推定して決めた。ヤツガシラは自分で巣材を運搬して巣をつくらないため、巣箱の内部には切ったワラを数cm敷き詰め、産座の予定位置にはあらかじめ人工的に産座をつくった。ヤツガシラはこの産卵予定位置に産卵した。

制作した巣箱は1個で、1990年(A調査地)と1993年(B調査地)に、A・B調査地共に1個だけ架設した。B調査地に架設した巣箱は、A調査地に架設した巣箱を再架設したものである。

架設場所はいずれもヤツガシラが前年に繁殖に利用した建物で、いずれも建物の繁殖に利用したのではない面の壁に、A調査地ではくぎで打ちつけ、B調査地では戸袋上に置いて固定した。

利用状況

A調査地では、3月25日にヤツガシラを初認し、この日、雄と思われる個体の営巣場所の探索行動が観察された。4月上旬には雄が巣箱上でさえずるのが観察されたが、以後ははっきりしたさえずりは確認されず、4月14日に付近で、さえずっていた個体と思われるヤツガシラの雄が捕殺されているのが発見された。そのまま架設しておいた巣箱の内部を6月2日に確認したところ、雄の死亡により産卵期に放棄されたと思われるヤツガシラの卵2個を発見した。

B調査地では、4月17日につがいで巣箱に出入りし、営巣場所の選定を行なっているのが観察された。4月24日に雄が巣箱で抱卵中の雌に給餌を行なっており、巣箱を利用して繁殖していることが確認された。5月10日頃ヒナがふ化し、5月16日にヒナの声が確認された。5月20日に雌も巣箱から出て

1993年12月21日受理

1. 〒736 広島県広島市安芸区船越南二丁目19-26-328

きて、つがいでヒナへの給餌を開始した。6月5日にはヒナがはじめて巣穴から外に顔をだし、6月6日、最初のヒナが巣立ちした。6月12日には7羽のヒナすべてが巣立った。

考察

小池・樋口(1989)によると、これまで日本で人工の営巣場所を利用し繁殖した鳥は、フクロウ、シジュウカラ、コムドリなど、計26種が記録されている。今回、ブッポウソウ目ヤツガシラ科の鳥が、新たに1種加わったことになる。

ヤツガシラの営巣場所は樹洞や建築物などであるが、おもに樹洞で営巣する(山階 1941)。巣箱の利用例もあるが、まれである(Hammond & Evertt 1980)。今回の調査ではそれぞれ別の繁殖地で1回に1個ずつ計2回しか巣箱を架設していないが、いずれも繁殖に利用されている。今回ヤツガシラ用に新たに設計した巣箱は、ヤツガシラの体の大きさに対してかなり大型で、しかも横長に床が広い(図1、図2)。この形状の特徴が、今回ヤツガシラに利用された原因であったのかもしれない。

ヤツガシラは、ふ化から巣立ちまでに要する期間が巣箱利用種を含めたほかの多くの種より比較的長く(中村・柏木 1991, 飯田 未発表)、ヒナはかなり小さい段階から巣の中を活発に歩きまわる(図3)。これらのことから、ほかの一般的な巣箱利用種と比較し、巣箱の内部空間、特に床面積は広めのほうがよいものと思われる。

一方、改良点としては、巣穴の大きさがある。今回の巣箱の巣穴の大きさは 5×5 cmであったが、これは少し広めと思われ、ヤツガシラのほかの繁殖穴の例から、 4.5×4.5 cmが適当と思われた。

今回ヤツガシラ用の巣箱を架設した理由は、親鳥とヒナの捕獲を容易にするためであった。このほかにも利点としては、建物の壁面に架設することによりヘビなどの捕食を避けることができるものと思われる。

一方、問題点としては、すべての巣箱に共通することであるが、人間に対して巣が発見されやすい点である。そのため、これまで積極的に架設しておらず、調査対象として選出したつがいの生息地でしか架設していない。

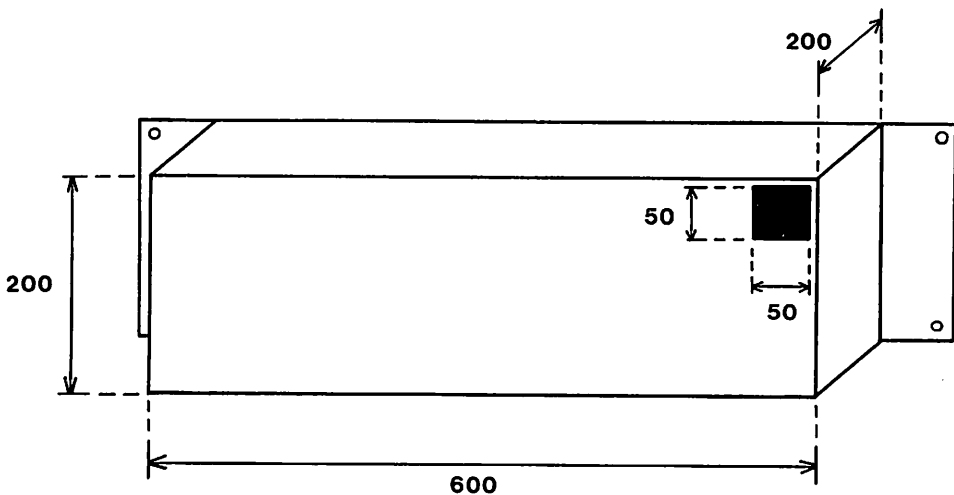


図1. ヤツガシラ用巣箱の模式図。単位はmm。

Fig. 1. A nest box for the Hoopoe. (in mm.)



図2. ヒナの食物（ケラ）をくわえて帰巢した親鳥.

Fig. 2. Parent bird returning to the nest box, with food in its bill, during the nestling period.



図3. 巣箱の内部状況.

Fig. 3. Inside the nest box.

当地方ではヤツガシラは1回の繁殖期に2回の繁殖を行なうことが多いようであるが（飯田 未発表）、ヤツガシラは巢内のヒナのフンを運び出さないことがあり、巢の内部は非常に汚れていることが多い（日本野鳥の会軽井沢支部 1987, 飯田 未発表）。巣箱の場合、人為的に巢内を清掃し消毒することも可能なので、ヤツガシラが第2回目の繁殖に入る前にこれを行えば、2回目の繁殖の成功を促進することができるかもしれない。

引用文献

- Panov, E. N. 1992. The birds of south Ussuriland. 極東鳥類研究会, 北海道.
- 藤井忠志. 1992. 岩手・豊間根長内におけるヤツガシラの巣立ちと残存雛の死について. *Strix* 11 : 341 - 342.
- 小池重人・樋口広芳. 1989. 人工営巣場所の種類と架設効果. *Strix* 8 : 1 - 34.
- 中村浩志・柏木喜久男. 1991. 日本に定住できなかった鳥ヤツガシラ. *動物たちの地球* (28) : 114 - 117.
- Hammond, N., and Everett, M. 1980. *Birds of Britain and Europe*. Pan Books, London.
- 日本野鳥の会軽井沢支部. 1987. ヤツガシラの繁殖記録. 日本野鳥の会軽井沢支部, 長野.
- 山階芳麿. 1941. 日本の鳥類とその生態 第2巻. pp. 460 - 466. 岩波書店, 東京.

Breeding record of Hoopoe in nestbox

Tomohiko Iida¹

To study the ecology of Hoopoes *Upupa epops*, I set nest boxes in western Hiroshima. The nest boxes were set at study sites A and B, which are 30km apart. Only one box was at each site, and both were used for breeding.

The Hoopoe is thought to be a species which does not use nest boxes. In this study all nest boxes placed were used for breeding, possibly because the nest box was wide, had a large floor, and was much bigger than the Hoopoe.

The Hoopoe's nestling period is longer than many other species, and the Hoopoe itself is an ambulatory species, so even fledged birds will often walk around. Due to this, a large nest box may enhance its usefulness for Hoopoes.

1. Funakoshiminami 2 - 19 - 26 - 328, Aki-ku, Hiroshima-shi, Hiroshima 736